

研究発表会報告

パーソナルカラー研究会研究発表会報告

大島 未希

2001年8月25日に第一回パーソナルカラー研究会の研究発表会が開催された。

パーソナルカラーのコンサルティングの実例や、個人的研究、あるいは色彩調査の資料などの紹介、文献調査から得た知見なども、全国大会発表のリプレイと共に発表しようという考えで研究発表会が開催された。

この発表会では、冒頭に電気通信大学の小林光夫教授に「パーソナルカラー研究とコンピュータ」と題する講演をしていただき、特に当日の朝4時に完成したばかりの「Colorcel」と命名された色値変換と色彩表示のソフトの公表は素晴らしいことであった。

この会の発表は8件で、参加者の予測を30名として準備を行っていたが、参加者総数は71名になり、目白デザイン専門学校の教室が超満員の状態で、盛況であった。以下に特別講読の概要と各発表者がまとめた発表概要を報告する。

●特別講演

パーソナルカラー研究とコンピュータ

電気通信大学 小林 光夫教授

パーソナルカラー研究におけるコンピューター導入の意義と、講師により開発された色彩情報処理用のコンピューターソフトである「Colorcel」の機能の具体的な解説がPCプロジェクターを用いてなされた。

導入後の研究環境としてデータベースとしては2種、情報処理用ソフトには3種が特に用意されている。「Colorcel」は色彩情報処理に使用されるソフトであり、「Excel」が使えれば容易に使用できるパーソナルカラーリストにとって極めて有用なソフトである。

各表色系の表色値を相互に自由に変換できる色変換機能と得られた表色値を1次元から3次元までの様々な色空間として表示ができるグラフ作成機能とがある。

●研究発表

1. パーソナルカラー診断結果分析表報告

風見 なほみ

パーソナルカラー診断が、日本に導入されてから15年以上が経ちその間には様々な提唱理論が論じられ、自身がライセンスを習得した理論(分類基準など)以外に触れる機会は殆どなかった。

アンケートでは、パーソナルカラーリスト及び、パーソナルカラーアナリスト達の診断結果の基準と、その傾向を目的とした調査を行った。

今回はアンケート全22項の中から、下記の内容に関する報告を行う。

- I : 診断基準 II : 色に関する内容
III : 診断結果と好みの相関関係

2. ファッションablといわれる街における快適色の調査研究-全国大会発表紹介-

日高 久美子、福永 節子、黒田 まみ子、
東郷 悦子、徳田 代智子、門田 真作子

色の選択肢の多い時代の「快適色」「快適ファッション」とはどういうものなのか、また、「代官山」「銀座」「自由が丘」での調査により、街のイメージと人々の装いの関連について考察を試みた。

(結果)◇「なじませる」と「メリハリ」がキーワード。「対照色相・対照トーン配色」で「なじむ」「調和する」という要素が見いだせなかった装いは評価が著しく低かった。◇街によって、ファッションラインが微妙に違い、その街のイメージとマッチした。

3. ランジェリーの色彩傾向と快適色

峰野 千秋、鎗田 環

ランジェリーカラーについて、首都圏大手百貨店・量販店・専門店における店頭調査とアンケートによる10代～60代女性の意識調査の結果報告。

持っている下着の色・一番多く持っている下着の色・一番好きな下着の色・これから買いたい下着の色のTOTALの結果、及び年代別意識の違い等を中心に報告。アウターに響かない等色の持つ機能的特性だけでなく精神面も含めた選択がされており、各年代

の持つ精神的特徴が下着の色選びにも大きく左右する事が判る。尚、この様なマーケティング調査は、快適色を使用した新商品等の提案を目的とする。

4.衣服購入に及ぼすパーソナルカラー診断の影響-その後-全国大会発表紹介-

堤 弘子、鈴木 頼子、小木 ゆみ子、富永 日鶴、塩田 敬子、平良 木節

この研究は、パーソナルカラー診断が衣服購入に及ぼす影響について、診断を受けた100名を対象に、診断前・後に所持衣服の色を調査し、各タイプごとに診断前と後との衣服購入行動の変化を調査した。その結果診断以後は、似合う色と診断された色を取り入れる傾向が強いが、その影響力は4つのタイプそれぞれに異なっていた。また、どのタイプも、似合わない色と診断された色を着なくなる傾向が非常に強いという調査結果となった。

5.PCCS色票のパーソナルカラーシステムによる分類-カラーナビシステムの基礎

永田 泰弘、野坂 瑛子、田所 愛子、芳賀 はま子

ブルーベースとイエローベースによる色彩の2分類システム、あるいは更に、春夏秋冬の4分類にするシステムは、パーソナルカラー診断の基本となる色彩分類の考え方として存在しており、色彩調和を求める手法として、理論的な裏づけはいまだ不十分としても、経験的に有効と認識されていると考えている。

このシステムをパーソナルカラー診断以外の配色に応用することの有用性に気付いて、検討しているのがカラーナビシステムと命名した方法である。そのために日本での配色教育の道具として使うことを目的に、普及度が高く価格も低廉な日本色研事業発行の「新配色カード199」を4分類することを検討した。

6.PCCS色票を用いた配色指導の実例-カラーナビシステムの応用-

田所 愛子

カラーナビシステムというシステムティックな配色手法を使って、イメージ表現のトレーニングを行っている。同じ色相グループを使って4つの違うイメージを表現したり、イメージワードからのナビゲーションで配色表現することを課題としている。文章を作成するときにまず文型にあてはめて構文するようなものだが、誰にでもとりあえずは目的にあった配色が

可能になる。今日、イメージの世界はますます多様で微妙だが、配色が第三者にも同じイメージとして伝わることが評価の基準になる。身近な色票で、色に触れ、表現し、実感することを繰り返すうちに配色の力が身についていく。

7.ドレープの色彩的特徴の分析-全国大会・カラーフォーラム発表要約-

大島 未有希、小林 光夫、糸日谷 崇之、遠山 令子

内容は「パーソナルカラーアナリシスに用いられるドレープの色彩的特徴」(小林光夫ら:カラーフォーラムJAPAN2000論文集, pp.137-140(2000).)の紹介。

ドレープ測色値の分析は、過去にマンセル表色系によって行われ、最近NCS表色系で詳細に統計学的に分析された。それらの結果が下記のように報告された。

①全てのドレープは四季に分けられる。

②テストカラーでは、クール系(夏と冬)からウォーム系(春と秋)への色相のずれ方向に規則性がある、さらにNCS表色系では秋は春に比べ黒みが多く、夏は冬に比べ白みが多い。

これらの事より四季毎に特色が見られた。

8.ドレープのアンケート調査の分析-全国大会発表紹介-

遠山 令子、小林 光夫、糸日谷 崇之、大島 未有希

内容は2001年色彩学会全国大会「パーソナルカラーアナリシスに用いられるドレープの色彩に関するアンケート調査の分析」(大島未有希ら, 日本色彩学会誌, Vol.25, SUPPLEMENT, pp.92-93(2001).)の紹介。

対応色アンケート調査データをNCS表色系で分析し報告した。

①多くのドレープセットに対応色があった。

②ニュアンス面領域別に対応色の四季全体に5つの傾向を認めた。以上の全国大会発表に加え、新たに、ニュアンス面に対応色の四季別に傾向が見られる事が大島・遠山により報告された。

すなわちウォーム系では春は黒み秋は白み、クール系では夏は黒み冬は白みのばらつきの平均が小さい事が分かり、これらの事がカラーアナリストの色選択時の意識と関係する事が示唆される。

本研究発表会は来年度もほぼ同時期に開催することを予定しており、多くの発表が申し込まれることを期待している。